

◇卒業論文要旨(昭和49年3月卒業生)◇

四 日 市 市 の 工 業

一 港 湾 と の 関 連 を 中 心 と し て 一

遠 藤 幸 子

この論文は、四日市市の工業を四日市港の機能との関連からとらえたものである。第一章「四日市市の概観」では、四日市市に関する基礎的な事項を把握して、後章を理解する助けとし人文環境とくに、四日市市の沿革と人口に力をいれた。第二章「港湾との関連からみた四日市市の工業の発展と構造」は、この論文の骨子ともいべき章であり、四日市市の工業の発展の過程及び現状をあくまで四日市港の機能の変遷と実態に対照させて論じたものである。

ある地域の工業を理解するためには、まず工業センサスを読み取ることから始めるのが一般的であるが、本論では四日市市役所発行の工業センサス調査結果報告を中心に使い、港湾統計の類をも併行して用いた。たとえば、四日市の三大在来工業の一つである植物油工業は第一次大戦後に、これまでの菜種油一辺倒の生産から脱却して、大豆油・ごま油なども生産するようになった。この原料をすべて輸入に頼ったことから、港湾立地型の産業になっていったということに着目し、四日市港の植物油原料の種類別輸入量の変遷やそれらの四日市港全輸入額に占める割合、そして現在の植物油工業の四日市の工業に占める位置を重要な問題として取り上げた。

四日市市を対象地域とした工業地理学関係の論文は多いがそれらは皆、工業のほんの一面のみを取り上げて論じたに過ぎず、結局、四日市の工業を全体として把握していないように思われる。そこで、私としては、四日市の工業をもっと大きく把握したいと考え「四日市市史」の力を借り、港湾との関連から追求することにした(第二章第一節：工業の発展の経過)。海上交通の発達により、天然の良港をひかえて物質の集散地として君臨していた四日市が、明治20年代の陸上交通の発達によって商業都市としての機能を名古屋に奪われ、衰退を余儀なくされていた時、商業都市四日市から工業都市四日市へ脱皮し、四日市港を商業港から工業港へ転換させようという動きが生じてきた。そして、海外貿易の隆盛とあいまって四日市港は、伊勢湾唯一の良港として発展していった。ところが遅れて整備された名古屋港が四日市港にまさるヒンターランドに物を言わせ、徐々に四日

市港の地位を奪っていった。こうして四日市が、すべての面で、名古屋に一步譲ることになった経過を述べた。

第二章では以上のように、四日市港を行政単位 of 四日市市と結びつけたので、もっと広い視野に立って四日市港の機能を探る必要性を感じ、第三章では「四日市港とヒンターランド」の結び付きを工業に焦点を当てて追求してみた。そしてそれが単なる港湾の研究に終わることがないように四日市市の繊維工業とも関係があり、かつ四日市港の代表的な輸入品でもある羊毛と綿花に、そして片貿易是正のための輸出貨物集貨対策と関係のある陶磁器に注目して論を進めた。

都市化に伴う世田谷区の農業の変容

奥 田 留 美 子

世田谷区は東京都の中において、政治・経済・商業の中心的地区の周辺住宅地として安定した状態にあり、かつての「近郊」ということばは完全にあてはまらなくなっている。そして、現在市街地化の進行している東部区部や西方の市部と異なり、市街地化の一段落した本区では、農業すなわちその基盤となる農地の、住宅地供給の役割は終って、「緑地」という都市の中の分化された一つの役割を持つようになっている。

一方、生業としての農業の面から見ると、耕地率は低いが都内において出荷量を誇る作物もあり、また特定の作物に専門化した専業農家も多く、全く農業的に成立する要素が消え去ったとは言えない。本区の農業は、地形、気候、土壌、その他の有利性を条件として行なわれているものではない。農作物としては いたみやすい軟弱野菜、花卉園芸を中心としてはいるが、それは価格が高いためである。野菜作において 経営耕地の小規模な所では自家消費が多く、大規模の所は出荷を中心として農業を行なっているが、いずれも不動産兼業による収入を中心とする農外収入が、全収入の何割かを占める。農外収入の方が多い農家は、結局農業は二義的になり、作物は踏て作りの的になり、最終的には離農する傾向があるようである。

さて次に、本区農業全体の、現在そして将来の方向について述べる。本区の農業は、東京の近郊農村地帯としての位置を保っていた時期から今日までの都市化の進行の過程で、農業衰退の方向をたどるものと、住宅地化に付随した変化をしてきたものの2つの流れに別れて進行してきた。そし